

ICTを活用した日本語文章表現指導の開発

—相互評価におけるICTの活用—

田 中 宏 幸

Development of Japanese Writing Instruction by Utilizing ICT

Hiroyuki TANAKA

安田女子大学文学部日本文学科

要 旨

「日本語文章表現演習」では、2020年度からICTを活用した授業を展開している。ワープロによって作品を書き上げるだけでなく、Google Classroomにおいて全員の作品を読み合い、メッセージを送り合うのである。この方法は、オンライン授業の最大の難点である「学習者相互のコミュニケーション不足」を軽減する方法として生かされ、対面授業においても、作文の評価・処理の問題を改善する要となった。学習者の作品をデジタル化することは、教員による編集の手間を軽減し、評価・処理を的確に行うことに役立つ。また、ICTを用いて全作品を読み合うことは、それぞれの作品の良さから学び合う姿勢を生み出し、表現意欲を高めるものとなる。さらに、文章表現技術を意識的に使用することにも繋がっていくものである。ICTを活用して相互鑑賞する場を設けることは、文章上達の秘訣と言われる「看多・做多・商量多」を実現することに他ならない。その具体的方法と効果について考察する。

キーワード：ICT活用、相互鑑賞・相互評価、随筆、続き物語、書評

1 はじめに

2021年度も新型コロナウイルス感染症の拡大によって緊急事態宣言が出される状況となった。2020年度は4月20日から約8週間に渡ってオンラ

イン授業を実施したが、2021年度も5月17日から約6週間に渡って、再びオンライン授業を行うこととなったのである。

オンライン授業（オンデマンド式）では、事前に動画コンテンツを作成しておき、授業時間中は、その動画を見せ、課題に取り組みせることになる。動画コンテンツ作成には、主として書画カメラを用いる。テキストの解説や学生の作品例を全画面表示して、そこに直接マークしながら説明し、その様子を録画していくのである。この方式ならば、受講生は手元にある印刷物に集中することができ、通常の対面授業に近い形を再現できる。

とはいえ、学習スピードは個々人に任されており、その進捗状況を把握するのは困難である。質問はGoogle Meetで受け付けて個別に対応するが、集団として学び合うというダイナミズムにはほど遠い。解説の途中で短答式課題を挟み込み、回答状況を即座にグラフ化するなど、ICTによる同時性を生かすようにはするが、回答結果を分析する時間が足りず、表面的な考察に終始することになりやすい。

このように、授業準備や事後処理に費やす時間が倍増し、授業中もストレスのたまるオンライン授業であるが、ICTの活用にも慣れてきて、対面授業からオンライン授業への切り替えも比較的スムーズに行うことが出来た。そのポイントとなったのは、対面授業を行う際にも、学習材の配布や課題の提出等においてGoogle Classroomの機能を活用していたことにある。なかでも効果的であっ

たのが、相互鑑賞会における活用である。

教員にとっては、提出作品がデジタル化されていることによって、全作品集を編集する手間が軽減される。学習者にとっては、全作品を読むことができるとともに、自分の作品について読み手から必ずメッセージがもらえることになる。これらが相まって、オンライン授業の最大の難点である「学習者相互のコミュニケーション不足」を軽減することができた。作品を読み合い、メッセージを送り合うことによって相互理解を深める方法は、文章表現力の向上と人間関係の形成の両面に寄与するものとなった。

前稿「オンライン授業による日本語文章表現指導の開発」(紀要第49号)では、2020年度「日本語文章表現演習」(学部2年生対象)の上半期(短作文演習)を中心に、オンライン授業における指導の工夫について考察した。本稿では、それを踏まえつつ、2021年度「日本語文章表現演習」(34名受講)の下半期(長作文演習)の授業展開を報告するとともに、特に相互鑑賞・相互評価におけ

るICT活用の方法と意義について考察する。

2 授業の概要

2021年度の授業計画は、基本的には前年度と同じである。(2020年度は105分×13回という変則的展開であったが、2021年度は通常通り90分×15回の展開となっている。)

テキストには、前年同様に、金子泰子『国語教師が教える二百字作文練習』(溪水社、2018)を用いた。自宅での学習を強いられる場合、テキストがなければ、見通しを持って学習に取り組むことができない。文章表現技術に関する分かりやすい解説、取り組みやすい課題、学生による題目例・作品例がセットになって示されており、表現意欲を高めるものとして、この一書を選んだ。

上半期(第8回まで)は、このテキストに沿った展開である。第9回以降は、上半期に学んだ文章表現技術を生かして、長作文の練習となる論理的な文章(随筆・書評)、文学的な文章(続き物

〈表1〉授業の概要

| 実施日 | 主な学習課題 | 習得したい文章表現技術 |
|--------------------|--|---|
| (1) 4/6 | ・前年度受講生のポートフォリオの「あとがき」や作品例を読み、モチベーションを高める。 ・これまでの作文学習を振り返る。(800字程度) | ① 段落の最初は1字下げにする。(原稿用紙の使い方) ② 文章に題をつける。(内容を的確に表す題、読み手を惹きつける題) ③ 題材を絞り込む。(些細なことでも、自分らしさがあればよし。) |
| (2) 4/13 | ・魅力的な題について考える。 ・「自己紹介(200字)」を書く。 ・ペンネームを考える。 | ④ 書き出し・書き結びに注意する。(不必要な前書きはやめる。) |
| (3) 4/20 | ・「自己紹介(200字)」の相互鑑賞。 ・「勧誘文」のポイントを理解する。 ・「勧誘文(200字)」を書く。 | ⑤ エピソードを具体的に描く。 ⑥ 文体を使い分ける。(レポートは常体) |
| (4) 4/27 | ・「自己紹介」優秀作に学ぶ。 ・「勧誘文」の相互鑑賞。 ・「好きな味(200字)」を書く。 | ⑦ 五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)と客観的スケール(数値など)を活用する。 ⑧ 比喩や擬音語・擬態語を効果的に使う。 ⑨ ことばを的確に選ぶ。(類義語辞典を活用する) |
| (5) 5/25 online | ・「勧誘文」優秀作に学ぶ。 ・「好きな味」の相互鑑賞。 ・「風景描写(200字)」を書く。 | ⑩ ことばの重複使用を避ける。 ⑪ 叙述の順序(空間・時間)に方向性を持たせる。 |
| (6) 6/1 online | ・「好きな味」優秀作に学ぶ。 ・「風景描写」の相互鑑賞。 ・「人物描写(200字)」を書く。 | ⑫ 人物描写では外貌よりも性行を書く。 ⑬ 文章の構成や展開を意識する。(起承転結、序破急など) |
| (7) 6/8 | ・「風景描写」優秀作に学ぶ。 | |

| | | |
|--------------------|---|---|
| online | ・「人物描写」の相互鑑賞。 ・「出来事を描く(200字)」を書く。 | ⑭ 漢字とかな、文字・符号を使い分ける。 (形式名詞などは、かな書きに) |
| (8) 6/15 online | ・「人物描写」優秀作に学ぶ。 ・「出来事を描く」の相互鑑賞。 ・上半期の学習の振り返り。 *文章表現技術の習得状況に関する意識調査(第1回) ・「続き物語」の構想を練る。 | ⑮ 短文(一文一義)にする。長短の変化。 ⑯ 首尾を照応させる。 ⑰ 文末表現に変化をつける。(歴史的現在の手法、体言止めなど) ⑱ 視点人物を変えてみる。 |
| (9) 6/22 online | ・「出来事を描く」優秀作に学ぶ。 ・「続き物語(800字程度)」を書く。 | 主な学習内容 a 場面の展開を明確にする。 |
| (10) 6/29 | ・「続き物語」の相互鑑賞。 ・ビブリオバトルによる本の紹介。 | b あらすじを一文に要約する。 c 作品分析の観点(人物設定、場面設定、心情表現、情景描写、展開、心情の変化、セリフ、結末など)を明確にする。 |
| (11) 7/6 | ・「続き物語」優秀作に学ぶ。 ・「書評」の書き方を学ぶ。 ・「書評—友達のお気に入りの本を勧める(800字程度)」を書く。 | d アウトラインを作成する。 e 客観的立場から述べる。 |
| (12) 7/13 | ・範文の発想法と論の展開の分析。 ・「随筆—私の流儀(800字程度)」を書く。 *手紙の書き方に関する事前調査 | f 自分の流儀を擬態語で表現する。 g 反論容認型の論の進め方を生かす。 |
| (13) 7/20 | ・手紙の書き方を理解する。 ・通知文・依頼文を作成する。 | h ビジネス文の書式を習得する。 |
| (14) 7/27 | ・随筆「私の流儀」の鑑賞会。 ・書評に関する感想交換会(鑑賞会) | i 自分の作品を他者の目で読み返す。 |
| (15) 7/31 | ・「私の流儀」優秀作に学ぶ。 ・「文章表現に対する今の思い」(学習のまとめ) *文章表現技術の習得状況に関する意識調査(第2回) | j 省察と自己評価。 k 最優秀自作品の選択と理由の明確化。 |

語)、実用的な文章(ビジネス文書)を書くこととした。

上表に示すように、上半期は、200字作文によって「基礎的文章表現技術」の向上を図ることとしている。「文章に題をつける(話題の焦点化・主題の明確化)」、「書き出しと書き結びに注意する(首尾の照応)」、「文体(常体と敬体)を使い分ける」、「五感と客観的スケール(具体的情報)を活用する」、「比喩表現を活用する」、「会話文や副詞句を活用する」、「ことばを的確に選ぶ(類義語の使い分け)」、「叙述の順序に(空間や時間などの)方向性を持たせる」、「文字・符号を使い分ける(漢字とかなの使い分け、漢字の使用率など)」、「一文一義を原則として、短文にする」、

「ことばの重複使用を避ける」、「文末表現に変化を付ける(歴史的現在の手法、体言止め、倒置法)」などである。これらは、描写文を書く場合にも、説明文を書く場合にも必要となる表現技術であり、読み手に伝わる文章の基本として、常に意識しておくべきことである。

下半期は、600字～800字程度の長作文である。5つの課題に取り組んだ。

(1)「続き物語」を創作する。(注1)

黒井千次の短編「見えない隣人」(『星からの1通話』講談社文庫)の続き物語を創作する。隣のアパートから届く料理の匂いだけで、まだ見ぬ住人に好意を抱くようになった主人公が、ある日境界にどのような行動を取るようになったかを描い

ていくのである。「ところがある日を境に」「数日後の」「次の日、一郎は思いきってその部屋を訪れた」という語句を使って物語を展開させるように条件付けておく。原作の場面設定・人物設定を生かしながら、人物描写・行動描写・心理描写・情景描写に力を注ぐ学習である。

(2) 範文の「枠組み表現」を活用して随筆「私の流儀」を書く。(注2)

森毅の随筆「雑木林の小道一ふらふら」(『ひとりで渡ればこわくない』ちくま文庫)の発想の仕方と論の展開を借り、「私の流儀」を擬態語で表して、その意義を主張する。ここでは、日常化している自分の生き方やこだわりを言語化するとともに、想定される「悪い評価」に反論を加えることで、自分の流儀の意義を具体的に論じていくことをねらう。論理的な文章展開を身に付けていくのである。

(3) 「会議の開催を関係各位に通知する手紙」を書く。(注3)

上司から通知文の作成を依頼されたという設定で、定型を踏まえた実用的な文章の書き方を習得する。ここでは、内容よりも形式の習得に重点を置く。自己表現よりも情報伝達の正確さを求めていく学習である。SNSに親しんだ現代の若者たちは、手紙を書くことから遠ざかっており、手紙に関する知識も予想以上に乏しくなっている。こうした実情を踏まえ、「手紙の書き方」を身に付ける必要性を再認識させ、課題の手紙を書きながら基本知識を確かめていくという手順を進めることとした。

(4) 「友人にお気に入りの本を勧める」ために書評を書く。

これまでの学びの集大成として位置づけられる自由作文である。自分の感想を書くのではなく、本の良さを客観的に伝えるのである。本の選択、紹介内容の絞り込み、文章の展開、表現語句の選択など、総合的な力が求められる。

そこで、記述前に「簡略版ビブリオバトル」(4～5名編成)を行うことにした。3分間で本を紹介したのち、発表内容でわからなかった点などについてディスカッションするのである。この時間を設定することで、作品分析の観点も具体化し、補足説明すべき内容も明らかになる。「話す」ことによって「書くべきこと」が明確になるので

ある。

この対話経験によって「想」が豊かになったところで、「記述上の注意」を喚起する。例えば、「私は」を主語とせず、「読者は…と受け止めるだろう」と述べれば、客観性のある論評風の書き方になるなど、具体的なアドバイス(注4)も与える。このように、発想(選書と作品分析)から、文章構成の検討、記述、推敲に至るまでつながりのある学習過程をたどることによって、受講生全員が読み応えのある書評を書き上げ、36頁に及ぶ「書評集」が完成した。

なお、「書評」については、ICTを用いた相互鑑賞ではなく、ビブリオバトルのチーム内で読み合い、感想を語り合う交流会とした。書評の書き手が分かることによって、何を伝えたいかがいっそう明確になり、読書への関心も高まると期待されたからである。

(5) 「文章表現に対する今の思い」と題して、振り返りを書く。

15回の授業を振り返って、文章表現に対する思いがどのように変化したかを省察する学習である。また、「最もお気に入りの自分の作品」を選び、その作品に対する自己評価も書かせる。こうして、身についた文章表現技術を整理し、今後の課題を明確化させることで、学習内容が定着し、これからの文章表現生活への意欲も高まってくる。

3 相互鑑賞会の進め方(授業展開と時間配分)

本稿の中心テーマである「相互鑑賞を軸とした授業」の展開と時間配分は、次の通りである。オンライン授業(第5時)の場合、授業は4つのパートからなる。

第1パート(約20分)は、前回の相互鑑賞でもらったメッセージを確認する時間である。Google Classroomで「メッセージ一覧」(PDF/8頁)を配布し、自分の作品への評価を確かめさせる。続いて、「レジュメ」(PDF/8頁)を全画面表示しながら、「多くのメッセージをもらった優秀作」4～5編について、全文を音読し、講評を加える。メッセージについては、①「話題の魅力」(新鮮さ、切り取り方、視点など)、②「表現の魅力」(用語、比喩、会話、書き出し、

展開、結びなど)、③「伝わってくる書き手の人柄」の三つの観点から、「評論家風に論評するのではなく、一読者として受け止めたことを伝える」ように指示しているの、的の外れた指摘はほとんど無い。メッセージの良さも指摘しながら、作品の着眼点の特徴や表現技術の活用ぶりを共有していく。

第2パート(約25分)は、前時に提出された課題作品の「相互鑑賞」を行う時間である。「題」・「本文」・「作品に添えて」をセットにして編集された「作品一覧」(PDF/9頁)を読み、「指定された作品」にメッセージを贈る。続いて、全編を読み通して「お気に入り作品」を選び、メッセージを贈る。さらに時間の余裕があれば、「もう一編のお気に入り作品」にメッセージを贈る。

200字作文であれば、受講生全員(34名)の作品を15分余りで読み通すことができるので、メッセージを書き込む時間を加えても、25分あれば十分である。(なお、下半期の長作文では、16～20頁の枚数となるので、読み通すだけで30分以上の時間がかかる。その場合は、2つのグループに分け、グループ内で優秀作を選ぶようにする。)

第3パート(約15分)は、本時の課題設定の意図を説明して、書く内容をイメージさせる時間である。これは、古代修辞学でインベンションと呼ばれた「発想・構想」段階の指導に相当するものである。習得すべき文章表現技術を明確にするとともに、話題の想起に役立つヒントや、前年度の優秀作品例などを示して、ゴールイメージを持たせ、主題や話題の焦点化・鮮明化を図るのである。

第4パート(約30分)は、本時の課題に関する記述時間である。「200字作文」と「作品に添えて」を入力させ、Googleフォームで送信させる。また、本時の振り返りとして、「メッセージをもらった感想」と「今日の学び(今日のなるほど/次時への抱負)」も入力し提出させる。

記述と推敲に要する時間は個人差が大きい。時間切れとなった場合は、入力できたところまでを保存しておき、翌日までに仕上げて提出すればよいということにする。このようにICTを活用することによって、メ切に追われて満足できない作品を提出するという事態を避けることができる。好きなだけ時間をかけて推敲を重ねていくので、作品の質も上がるのである。

4 相互鑑賞会を行うための配慮事項

相互鑑賞会を行うための配慮事項は、以下の通りである。

(1)「作文」にはタイトルを必ず書かせる。

タイトル(「題」あるいは「見出し」)を書かせることは、主題を明確化させるということである。相互鑑賞会で、魅力的なタイトルの文章は多くの人に読んでもらえるということを実感させると、与えられた課題そのままに「○○について」という安易なタイトルをつける学生はいなくなる。最初に仮の題をつけておき、書き終えた後に題の適否を確認させるようにすると、「書き出し」と「結び」の整合性にも気をつけるようになる。

(2)「作品に添えて」という短文(100字程度)を添付させる。(注5)

指定字数内に書ききれなかった思いを書き添えるのである。工夫した点や、不安に思っている点や、迷っている点などが書き添えてあれば、書き手の意図も読み取りやすくなり、相互鑑賞会においてメッセージが書きやすくなる。書き手の思いを受けとめたメッセージをもらったとき、書き手は伝わったという思いを手に入れることが出来る。この達成感が、次回への表現意欲につながる。

(3)「全員の作品」を読み合う。

長作文の場合は所要時間の関係で2グループに分けざるを得ないが、可能な限り全員の作品を読める場を確保する。文章の良し悪しは、数編を読んだ程度では判断できない。できるだけ多くの文章を読む(多読する)ことによって、新しい発想や着眼の仕方、多彩な表現に出会い、他者の表現上の工夫に気づくことができる。

対面授業における従来の相互鑑賞は、4～6名の小グループに分かれて行うことが多いが、班員の構成によってうまく意見交換が行えないこともあった。それに対して、ICTを用いれば、全員の作品を一覧できるようになり、文章を客観的に評価する力も高まる。次に挙げるメッセージの交換と相まって、全員参加の学び合う関係が生まれるのである。

(4)「指定作品」と「お気に入り作品」にメッセージを書かせる。

一つは「指定作品」に向けたメッセージであ

る。担当表に示された指定番号の作品に対してメッセージを書かせる。こうすることで、全員が必ず1本のメッセージをもらえることとなる。もう一つは「お気に入り作品」に向けたメッセージである。全作品を通読した後、最も気に入った作品を選び、メッセージを書く。時間的余裕があれば、さらにもう1編の「お気に入り作品」にメッセージを書く。こうして、複数のメッセージをもらえたならば、誰か一人は自分の作品を優秀作として選んでくれたということになる。

そもそも学生たちの多くが作文嫌いになったのは、これまでの作文学習において、作文を書いても何の反応ももらえなかったという苦い思い出があるからである。確実に読んでもらえるという安心感、誰かから返信をもらえるという期待感がなければ、ますます書くことから遠ざかってしまうことになる。「励みとしての評価」がもらえる相互鑑賞会を設定し、メッセージを送り合うことは、「書くことは楽しい。これからも書き続けたい」という意欲を喚起することに繋がるのである。

(5)「ペンネーム」を用いる。

最初の段階では大半の受講生が相互鑑賞を行うことを嫌がる。自分の文章を他人に見られるのは恥ずかしい。他の人の文章は読みたいが、自分の

文章は見せたくない。こういう気持ちを受けとめながら、相互鑑賞の場を作っていくには、ペンネームの使用が効果的である。ペンネームを使うことで自分の作品も相対化でき、余計な先入観もたずに文章そのものに向き合うことができる。回数を重ねるにつれて、作者名や作品の優劣を意識することなく、それぞれの個性や面白さを感じ取れるようになっていく。授業の最後には、「この授業の醍醐味は作品鑑賞だ」と語る受講生が続出してくるのである。

5 教育ICT活用の意義

教育ICTは、授業場面に即してどのように活用されるか。文部科学省「学びのイノベーション事業実証研究報告書」(2014)では、表2のような授業場면을提案している。

また、野中潤(2019)は、Ruben R.Puentedura(2006)の論考を援用し、教育ICTの導入によって生じる教育の変化を「SAMRモデル」(表3)という4段階に整理して説明しようとしている。

こうした先行研究と照らし合わせたとき、本稿で報告している「ICTを活用した相互鑑賞会」はどのように位置づけられるか。

「A 一斉授業における活用」(教材の提示・配

〈表2〉授業場面とICTの活用

| |
|---|
| <p>A 一斉授業における活用</p> <p>(1) 教員による教材の提示 (全員が同じイメージを持てるように電子黒板やスクリーン等に投影。画像の拡大表示や書き込み、音声、動画等の活用)</p> <p>(2) 教員による教材の配布 (各自が手元で確認できるように教材を生徒の端末に配布。生徒は、個々に気づいたことをメモ、マークして、課題を認識)</p> |
| <p>B 個別学習における活用</p> <p>(1) 個に応じる学習 (一人一人の習熟の程度等に応じた学習。ドリル教材等で学習)</p> <p>(2) 調査活動 (インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録)</p> <p>(3) 思考を深める学習 (シミュレーション等のデジタル教材を用いた思考を深める学習)</p> <p>(4) 表現・制作 (マルチメディアを用いた資料、作品の制作)</p> <p>(5) 家庭学習 (情報端末の持ち帰りによる家庭学習)</p> |
| <p>C 協働学習における活用</p> <p>(1) 発表や話し合い (グループや学級全体での発表・話し合い)</p> <p>(2) 協働での意見整理 (複数の意見・考えを議論して整理)</p> <p>(3) 協働制作 (グループでの分担、協働による作品の制作)</p> <p>(4) 学校の壁を越えた学習 (遠隔地や海外の学校等との交流授業)</p> |

〈表3〉SAMRモデル（野中潤）

| | |
|-------------------|---|
| Substitution（代替） | 鉛筆の代わりにワープロなどが使われるなど、教育機能を代替する段階。（文房具の変化） |
| Augmentation（拡張） | ワープロによって語順の入れ替えや誤字脱字のチェックが容易になるなど、教育機能が拡張する段階。 |
| Modification（変容） | 協働作業の場で生徒同士が教えあったりする場面が生まれ、教え・学ぶ関係が変容する段階。 |
| Redefinition（再定義） | 学びの可能性が広がり、学びのありようが根本的に変容することによって、生身の教師でなければならないことは何かと問われる段階。 |

布）は、対面授業においても有効に機能した。紙媒体のレジュメや作品集が不要だということではない。デジタル化された教材や資料が併用されることによって、学習すべきポイントや課題が明確になり、個々人が主体的に学びやすくなるのである。配布する教材や作品集等の編集にかかる時間が大幅に短縮される点もICT活用の効果である。

「B 個別学習における活用」については、「(1) 個に応じる学習」「(3) 思考を深める学習」「(4) 表現・制作」が該当する。「SAMRモデル」で言えば、代替・拡張段階に位置づけられる。ワープロによる文章作成に切り替えることで、文字の巧拙を気にせず、どのようにすれば読み手に伝わるかということに集中できるようになった。語順の入れ替えや語句の修正が容易になり、各自が納得できるところまで推敲を重ねるようになった。

「C 協働学習における活用」については、「(1) 発表や話し合い」「(2) 協働での意見整理」に相当する。自分の文章をみんなに読んでもらい、評価してもらい、自信がつくという好循環を作り出すには、ICTが欠かせぬものであった。指導者から添削されて修正するという従来の評価・処理の方法ではなく、学習者同士が気に入った文章に評価を送るというスタイルによって、お互いが自分の文章に自信を持てるようになるというのは、「SAMRモデル」の「変容」の段階が生まれているということである。

この授業で、指導者が果たした役割は、表現課題の設定と表現技術の紹介をする「水先案内人」であり、学び合える関係を作る「黒子」であったと言えるであろう。文章表現活動は、「主体的な学び」を最も生み出しうる言語活動であるが、

「読み手との交流」を保障しなければ、その学習意欲は持続しない。学習者一人一人の思いを受けとめつつ、授業を展開することは「生身の教師」でなければできないのである。

6 学習者の変容

(1) 書くことに対する意識の変容

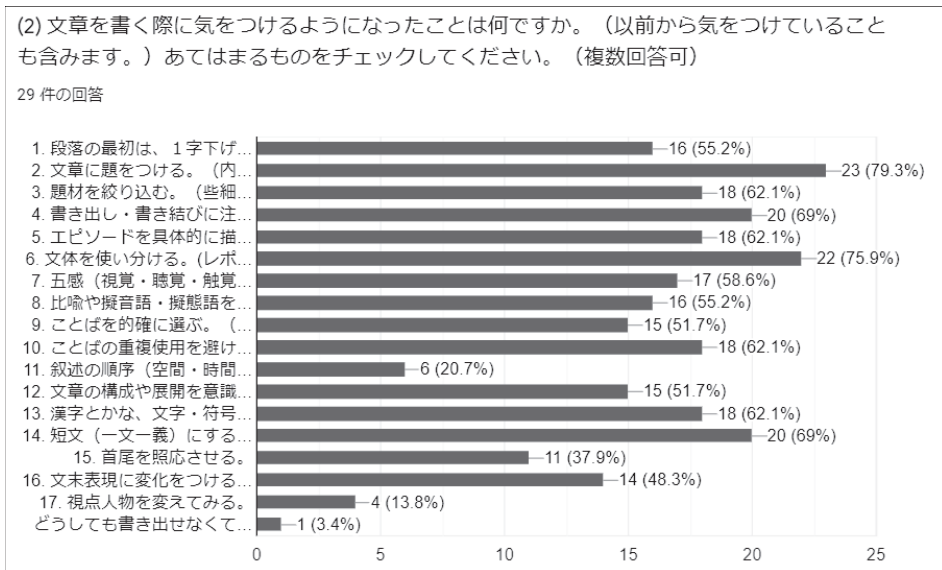
第1回の授業で「書くこと」に対する意識調査を行ったところ、「書くことが好きだ／どちらかと言えば好きだ」という肯定的回答が約60%であったのに対し、「書くことが苦手だ／どちらかと言えば苦手な方だ」という否定的回答は75%を超えていた。

第15回の授業における調査(自由記述)では、ほぼ全員が「文章を書くことが楽しくなった」「嫌だと思ふ気持ちがなくなった」「文章を書いて、読み手から感想をもらえることがとても楽しい」「文章を書くことが好きだと言えるようになった」「以前ほど苦手意識がなくなり、むしろもっと書いてみたいと意欲的に書けるようになった」と述べている。

このように大きな変化をもたらした要因として、「相互鑑賞会」が果たした役割は実に大きい。読み手がいるということ。読み手からメッセージがもらえるということ。この二つが「読み手に伝わる文章が書きたい」という意欲を掻き立てたのである。

これまでの文章表現の授業でも、手書きの原稿を10名ほどで回覧してメッセージを書き合う活動は取り入れていた。だが、ここまでの手応えは感じられなかった。原稿が活字化されたことによ

〈図1〉第1回調査結果



〈表4〉第1回調査結果(気をつけるようになったこと)

| | |
|-------------------------------------|-------|
| ② 文章に題をつける。(内容を的確に表す題、読み手を惹きつける題) | 79.3% |
| ⑥ 文体を使い分ける。(レポートは常体で書く。) | 75.9% |
| ⑭ 短文(一文一義)にする。長短織り交ぜる。 | 69.0% |
| ④ 書き出し・書き結びに注意する。(不必要な前書きはやめる。) | 69.0% |
| ⑤ エピソードを具体的に描く。 | 62.1% |
| ⑩ ことばの重複使用を避ける。 | 62.1% |
| ⑬ 漢字とかな、文字・符号を使い分ける。(形式名詞などは、かな書きに) | 62.1% |
| ③ 題材を絞り込む。(些細なことでも、自分らしさがあればよし。) | 62.1% |
| ⑦ 五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)と客観的スケールを活用する。 | 58.6% |

て、メッセージを書く際に、書き手の存在を気にせず、文章表現そのものと対話することができたのも、こうした変容をもたらした要因だと思われる。

(2) 文章表現技術の向上

「文章表現技術の習得状況に関する意識調査」を第8回と第15回授業で実施した。

第1回調査(図1)で「気をつけるようになった」と回答した上位9項目は表4の通りである。

これに対して、第2回調査では、「特に気をつけるようにしている」「なるべく気をつけるようにしている」という肯定的回答が表5の通りとなった。(回答者数33名)

この二つの調査は、問い方が異なっているの

で、単純な比較はできない。だが、表現技術への関心が高まり、それを生かして書いてみようとする態度が向上していることは明らかであろう。「題のつけ方」や「書き出しと書き結びの対応」を全員が意識するようになったことは、主題意識と文章構成意識が高まったということである。「言葉の的確な選択」など言語感覚に関する意識が高まっていることも特筆に値する。これも「相互鑑賞」によって、多彩な表現に出会い、その魅力を分析してきたことの成果である。

〈表5〉第2回調査結果（気をつけるようになったこと）

| 文章表現技術 | 特に気をつける | なるべく気をつける | 計 |
|------------------|---------|-----------|-------|
| ⑥ 文体の使い分け（常体と敬体） | 60.6% | 39.4% | 100% |
| ② 題のつけ方 | 57.6% | 42.4% | 100% |
| ④ 書き出しと書き結びの対応 | 51.5% | 48.5% | 100% |
| ⑩ 言葉の重複使用を避ける | 54.6% | 42.4% | 97.0% |
| ⑨ 言葉の的確な選択 | 48.5% | 48.5% | 97.0% |
| ⑦ 五感と客観的スケールの活用 | 39.4% | 57.6% | 97.0% |
| ⑭ 一文一義（一文を短く） | 38.4% | 54.5% | 92.9% |
| ⑧ 比喩表現の活用 | 18.2% | 66.7% | 84.9% |
| ⑬ 文字・符号の使い分け | 39.4% | 45.5% | 84.9% |
| ⑩ 文末表現に変化を付ける | 42.4% | 42.4% | 84.8% |
| ⑤ 会話文や副詞句の活用（描写） | 18.2% | 63.6% | 81.8% |
| ⑪ 叙述の順序の方向性 | 18.2% | 60.6% | 78.8% |

7 おわりに

北宋の詩人・欧陽脩は、文章上達の秘訣は「看多、做多、商量多」（多くの本を読むこと、多く文を作ること、多く工夫し推敲すること）の「三多」にあるとした。ICTを活用して相互鑑賞会の充実を図った「日本語文章表現演習」は、まさにこの「三多」を具現するものであった。

井上ひさしは「作文の秘訣を一言でいえば、自分にしか書けないことを、誰にでもわかる文章で書くということだけ」だと言っていた。この授業によって「自分にしか書けないこと」を探し続ける心と、それを「人に伝えることのできる表現力」を磨く方法を身に付けてもらえたのなら、授業の当初の目標は十分に達成できたと評価してよいであろう。

注

- 注1 松谷英明『ひとり学びのプリント50』（学事出版、1990）の実践を参考にした。
- 注2 澤田英史「論の進め方を学ばせる作文指導―枠組み作文―」『高等学校国語科新しい授業の工夫20選（第4集）表現指導編』（大修館書店、1998）の実践を参考にした。
- 注3 米田明美他『大学生のための日本語表現実践ノート・改訂版』（風間書房、2010）の課題を参考にした。
- 注4 甲斐利恵子「作品のよさを語り合おう」『国語教育相談室・中学校』No69（光村図書、2012）を参考

にした。

注5 大村はま『新編・教室をいきいきと1』（ちくま学芸文庫、1994）を参考にした。

参考文献

- 井上ひさし、文学の蔵編『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』新潮文庫、2001
- 樺島忠夫編『文章作法事典』東京堂出版、1979
- 金子泰子『大学における文章表現指導』溪水社、2016
- 野中潤編著『ICTで変える国語授業』明治図書、2019
- 野中潤編著『ICTで変える国語授業2』明治図書、2021
- 文部科学省「学びのイノベーション事業実証研究報告書」2014
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/030/toushin/1346504.htm
- Ruben R.Puente dura (2006) “Transformation, Technology, and Education”
<http://hippasus.com/resources/tte/>

〔2021. 9. 16 受理〕

コントリビューター：町 博光 教授
 （日本文学科）

